１．論文題目

村野藤吾の晩年の作品における設計の特質に関する研究

２．論文要旨

村野藤吾は日本の近代を代表する建築家の一人である。村野は、機能や構造の理念に合理性を求める近代建築全盛期に、ヒューマニズムを標榜した独自の作風を確立した。

本論分では、京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵の村野藤吾の設計図面を分析対象として、村野の晩年における三作品の設計プロセスを分析する。さらに、村野の建築作品が抽象と具体の両面において実現していることの考察を通して、村野の設計の特質を明らかにする。そして、村野が建築及び設計というものをどのように捉えており、その建築作品がどのような思考過程と思考形式より生み出されてきたのかを明らかにする。

第１章では、西山記念会館（1975）の設計図面を検証し、設計図面の制作時期や検討案の変遷を明らかにした。ホールや創業者の記念室といった諸機能を建物中央部に配置し、階段等のコアを三つの頂部に配置する三角形の平面計画は、構造的にも特性に応じてRC造とＳ造が使い分けられた明快な構成であった。しかし検討が進むにつれて、外壁曲面の凹凸形状が隣接する部分同士で連続し、その形態構成に合わせて素材も変化した。これにより、中央部と三方コアによる明快な分節が、中央部上部で三方コアがつながった門型のイメージへと変化した。機能や構造の明快な構成を基礎としながらも、最終的には外観は形態上の独自のアイデンティティを持つ形に変化した。外観において部分のデザインが推敲されながら、それらが互いに関係を持ち始め、全体構成にフィードバックされる過程が明らかとなった。

第２章では、松寿荘（1979）の設計図面を分析し、各図の制作時期や案の変遷を明らかにした。また、制作時期が連続する図面間において認められる変更箇所を抽出することで、この作品の設計において力点が置かれた部分を明らかにし、それがどのような空間効果を生み出しているのかを検証した。平面構成が先行して決定され、外観表現はそれを基にして検討された。平屋建て部分と二層部分の断面的なヴォリュームの差を違和感なく連続させるために、曲面が用いられた。平面的には、洋風のレセプションホールや食堂、和風の大広間等、主要な部屋をつなぐ接続部分の空間が検討され、シークエンスの展開が意図された。また、それらの各室の庭側の境界面も、案の進行とともに複雑化し、内部空間と庭の関係を重視していたことが明らかとなった。外観表現においては、案の進行とともに屋

根の各部分形状が変化し、隣接する部分同士にも分節や分離といった変形が見られるようになる。部分がそれぞれの場所に相応しい個性と自律性を持ちながら、それらが互いに関係付けられて全体が完成されていくという案の形成過程が確認できた。

第３章では、谷村美術館（1983）を対象として設計図面を分析した。村野の最晩年の作品であるこの建築は、事務所のスタッフを介さずに村野が単独で仕事を進めた。村野が施工者と直接やり取りを行ったため、打合せに用いられた図面には、大量の村野の指示が書き込まれている。これらの指示項目を抽出し分類することで、この建築において村野が重視していた項目を明らかにした。仏像の展示に相応しい内部空間や外観表現が追求され、採光の方法とそのための形態やディテールが検討された。遺跡のイメージが具現化された建物内外に渡る有機的な形態は、光の効果やシークエンスを追求する過程において、その形状が複雑化した。

第４章では、前三章で設計プロセスを分析した三作品を対象として、建築の構成において重要な三つの項目から比較・考察を行った。「敷地や機能との応答と形態表現」「内部空間の構成と外観表現」「構造体と形態表現」の三つの視点から、三作品の共通点や相違点を考察し、晩年の村野作品に見られる特質と、形態表現の背後に隠された村野の意図を明らかにした。

結章では、第一章から第四章までの考察を踏まえて、設計過程から明らかとなった村野の設計の特質を考察した。村野は設計の進行とともに生じる問題や矛盾に対して、固定的な建築理念や合理的な判断基準ではなく自由で価値横断的な独自の判断の元に、状況に応じた処理を柔軟に行い、デザインを進展させている。そしてその過程における、部分の形態操作において、自由奔放に見える三作品の建築表現に一定の構成原理を与えていることが明らかとなった。その思考の軌跡は、村野が述べるように弁証法的であり、それが作品に一元的な解釈に収まらない多様な表現を生み出した。その思考過程が、村野の設計における特質の一つであると言える。（以上）